

「肝切除のテクニックと患者管理」

国立がんセンター部長 長谷川 博 著

京都大学教授・第2外科

小 澤 和 恵

消化器癌の中で、肝癌は胃癌に次いで多い。しかし、肝動脈塞栓術が非常に良好な治療成績を収めている以上、肝切除術は安全に、しかも、より根治性をもって施行されなければ、外科医は信頼を失うことになる。この時期に、かねて肝切除術に情熱を傾けられてきた本邦の第一人者たる長谷川博部長によって「肝切除のテクニックと患者管理」が刊行されたことは時宜を得ており、非常に喜ばしいことである。

文中にも述べられているように、著者が臨床実践主義をモットーとして、血漿大量療法に始まり、術中超音波検査を導入し、更に片葉阻血手技を確立し、本邦における肝癌に対する外科的治療成績を著しく向上せしめたことは事実で、その基礎と臨床が調和した独得の考え方は世界のレベルを大きく越えたものと言って

よい。一貫した流れは肝切除成績を向上せしめようとする気骨である(冒頭で述べているごとく)。また、肝臓という代謝の中心的臓器の切除は管腔臓器を扱う感覚で行ってはならないということも事実である。こういった考えから、読者の立場に立ってわかりやすいことを心掛けて、情熱を込めて執筆されている。

頁をめくると、まず美しい数多くの写真に目を奪われる。肝切除の適応、アナトミー、手術手技、術前・術中・術後管理と肝切除に関する重要な点をすべて網羅しており、まことに表題にふさわしい内容の豊富なわかりやすい名著であり、肝切除術に関するあらゆる情報は本著をもって完璧とさえ言えるものである。

本書で特にすばらしい点は総合的アナトミーと手術手技である。アナトミーは立体的に把握しうるように

バナナ、サクランボ模型から出発し、鋳型標本を駆使されており、理解しやすい。手術手技に関しても、よりよい手術野をとることが秘訣であることを強調し、いろいろと皮膚切開法を詳述することから始まり、最も重要な肝門の構造と脈管の分離操作についても平易に、理解しやすく述べられている。

術後管理に関しては、著者の考え方と私のそれとの間に若干のずれがある。これは、第一線病院と大学という背景の違いに基づくものであるが、究極的には一致するものであると考える。

本書の至るところに盛り込まれている“Coffee Break”欄には著者ならではの執筆できない内容がいっぱい盛られており、非常に味わい深く、これを読まずに通る過すことがあってはならない。

これから肝切除をしようとする者にとっても無論のこと、専門の者にとっても必読の一冊である。

B5横判 182頁 原色図87 色図6
¥13,500 円400 1985

医学書院 刊